



2014年5月日英研究教育大学協議会・Imperial College London訪問



2014年6月APRU第18回年次総会(キャンベラ・ANU)

International Activities 2014

大阪大学の国際交流



2014年6月グローニンゲン大学創立400周年式典



World Tekijuku
 Creation of Harmonious Diversity through Scholarship
 Diversity is the origin of innovation, and is indispensable for the development of a prosperous human society.
 However, diversity can lead to conflict.
 Overcoming barriers caused by diversity will surely be crucial in the 21st century.
 Globality is a kind of language common to all humankind, capable of oversteering barriers caused by diversity.



2014年6月カロリンスカ研究所共同シンポジウム



Education Worth Spreading

II グローバル化が進む教育

II グローバル化が進む教育

平成25年度 卒業式・大学院学位記授与式 総長式辞<要旨>

グローバル社会における 調和ある多様性の創造



大阪大学から新たな一歩を踏み出さんとされている学部卒業生の皆さん、大学院修士・博士課程修了生の皆さん、専門職博士課程を修了された皆さん、おめでとうございます。これまで皆さんが大阪大学で苦勞を積み重ねてこられた努力と研鑽に対して心からお祝いし、讀えたいと思います。大阪大学で学んだ皆さんは、グローバルに活

躍できるリーダーとしての資質と能力が備わっていることを誇りに思い、品格と責任を持って社会に進んでいただきたいと思

「グローバル社会」

人類は長い歴史を経て、人間の活躍の場は比較的「均一性」の社会から、「多様性

の世界へと急激に変化を遂げてきました。言語、慣習、文化、民族、宗教、そして政治や国家、地球上には様々な多様性が存在します。今や地球規模での経済活動やそれに伴う人の交流により人の活動の場は均一性から多様性の存在する空間へと激しく変化しています。また、地球規模での気候変動、エネルギー問題、食料問題や人口問題、

そして感染症問題など様々な原因が複雑に入り組み、それぞれの問題解決が困難な状況になっています。地球規模で語れば語るほど物事は複雑に絡み合い、全ての問題は多様な要因を考えなければ物事の本質を見極めることは不可能な事態に陥っています。様々な紛争は、民族や宗教などの人類社会が有している多様性が基になっている例が多く存在します。人々が国境を越えて国際的に活動する現代においては多様性が人類社会に様々なコンフリクトを惹起します。その意味では多様性はグローバル社会においては大きな障壁でもあります。このため、均一化する必要性、グローバルスタンダードの必要性が叫ばれます。しかし、考えておかなければならない重要な点は、多様性こそ人類を心豊かにする源泉であり、未来に発展するためにはかけがえのない要素であるということです。多様性があるからこそ人類はここまで発展してきたし、多様性があるからこそ将来も様々な事態に直面してもそれを克服しさらに発展できる能力を有していると考えられます。例えば、言語一つとってもグローバルに経済活動するには今は英語が便利かもしれません。しかし、歴史が示すようにグローバルに使用される主たる言語は常に変遷してきました。また、言語は経済活動のほんの一つのアイテムであり、全体の中の一部でしかありません。単なるコミュニケーション手段の一つでしかありません。現在でも実用化されているようにスマートフォンに組み込まれ

ている言語認識ソフトがさらに発展すれば言語の壁は過去のものとなる可能性もあります。

「グローバルスタンダード」という言葉からイメージされることは、「グローバル化」＝「均一」であります。事実グローバル社会においては英語が重要な共通言語であり、物事も地球規模に照らして考える必要性に迫られてきました。これを突き詰めて行くと、全ての物事はグローバルスタンダードに基づき均一化する必要があることとなります。もっとも対極に位置するガラパゴス化は失敗の象徴のごとく語られることすらあります。ともすればグローバル化の流れは「均一性から多様性」という人類の歴史に逆行する感すらあるように思います。

「調和ある多様性の創造」

グローバル社会に生きるためには、グローバルスタンダードを確立して均一化するのではなく、逆に多様性を理解し、尊重し、維持することであり、かつ多様性を積極的に取り込みイノベーションの創造に役立てることだと、私は考えています。すなわち、「調和ある多様性の創造」によってのみ、グローバル社会の平和維持や、経済や社会活動に対するイノベーションを起こすことができるのではないのでしょうか？ さらに、このことにより人類社会のさらなる発展があるのではないのでしょうか？ 様々な多様性が複雑に入り交じるグローバル社会においては、グローバル化、すなわち物事の均一化

ではなく、「調和ある多様性の創造」が求められているのだと思います。

言語一つをとっても、大阪大学は25言語という多様な言語をカバーするとともに、アジアの諸言語の研究・教育で日本のトップに立っています。21世紀のグローバル社会において大学に求められる新たな役割は、まさに「調和ある多様性の創造」であると思います。グローバル社会においては多様性を維持しながら、多様性が生み出す障壁を乗り越えることが重要です。

大学は、学問という人類共通言語を有しています。学問は芸術と並んで、様々な障壁を乗り越える大きな力になります。学問を介して人と人との交流により、多様性の維持とそれが生み出す障壁の克服という、相反することの両立が可能となります。大学はこのように、「調和ある多様性の創造」によりグローバル社会に大きく貢献しなければなりません。大阪大学で学問を学んだ皆さんはグローバル社会で大きな役割を担うこととなります。

平成26年3月25日
大阪大学総長 平野俊夫





平成26年度 入学式 総長告辞<要旨>

適塾から世界適塾へ

大阪大学に入学ならびに進学されました皆さん、おめでとうございます。また、ご臨席いただきましたご家族の皆さま、関係者の方々に心よりお祝い申し上げます。

あらゆる可能性を秘めた前途洋々たる皆さんは、大阪大学の一員として、あらたな人生を踏み出すその第一歩を迎えられました。大阪大学総長としてこの上もない喜びであり、大阪大学は心から皆さんを歓迎いたします。

「なぜかと問う」ことの大切さ

皆さんは全国から未来や夢、様々な思いを胸に大阪大学に入学されました。皆さんにとっての大学とはなんでしょう？ 皆さんは小学校、中学校、そして高等学校などで勉学に励んでこられました。しかし、幼い頃には不思議に感じていたことで、大人になるにつれて、いつの日か「そういうものだ」と思考を中断してしまったものがある

と思います。たとえば、宇宙はどのようにして誕生したのか？ 生命はどこから、どのようにして誕生したのか？ なぜ熱帯魚はあれほどきれいな模様をしているのか？ 確かな答えがわからないことは無数にあります。ある疑問は素朴であるが故に、また他の疑問は日常的であるが故に、多くの人はいつしか疑問すら抱かなくなったと思います。大学とは、このような知識を積み重ねるだけでは解けない疑問を明らかにし、問題の奥深くに潜む原因を浮き彫りにする、あるいは未だ人類が答えを知らない疑問に対する解答を探すところです。

ペニシリンを発見したイギリスのフレミングは、当時感染症治療の薬剤の開発に情熱を傾けていました。その彼が、実験操作のミスで培養皿に混入したと思えるカビの周りでは細菌の生育が阻止されていることに気づきました。普通なら実験が失敗したと捨てて捨てるところですが、彼は「カビ

の成分が細菌の生育を阻止したのではないか」と考えたのです。そして、想定される成分をペニシリンと命名したのです。時に1928年のことです。その後、フレミングの論文を読んだハワード・フローリーとエルンスト・チエーンらがペニシリンの精製に1940年に成功しました。フレミング、フローリーとチエーンの3人は1945年にノーベル医学・生理学賞を受賞しました。ペニシリンの発見により世界中で計り知れない命が救われることになりました。

このペニシリン物語は偶然の発見、すなわち「セレンディビティ」の典型的な発見物語の一つとしてよく語られます。しかし、決して偶然で発見されたのではなく、フレミングの優れた観察力と知的好奇心に満ちあふれた柔軟な心が彼をペニシリンの発見に導いたのだと思います。このような知的好奇心に満ちあふれた非連続的で常識を覆すような基礎研究の成果は、人類社会に技

術革新を引き起こし様々な革新的な製品となり、あるいは先端医療となり社会に還元されます。さらに、学問が果たす役割には、社会への夢とロマンの供給と言う大きな役割があります。芸術が人の心を豊かにするように、知的好奇心の追求としての学問は、社会に夢とロマンを与えるのです。大学は、未来の原泉であるとともに、人々に夢をもたらします。そのもとは、「なぜかと問う」君たちの知的好奇心です。

「物事の本質を見極め 世界に羽ばたく」

皆さんは、日本は勿論、もっと広く世界に目を向け、「社会の変化に対応する」力を身につけなければなりません。では、現代の社会が求める人材、その能力とはどのようなものでしょうか？ 例えば、決断力、行動力、そして言語運用能力を含むコミュニケーション能力。これらは、しばしば優れたリーダーの素質として語られます。確かにこれらの能力を身につける必要はあります。しかし、急速に変化し続ける現代社会においては、これらの汎用的能力だけでは十分ではありません。これからの社会が求める人材とは、多元的な課題に潜む物事の

本質を見極め、従来からの常識や考え方を超えた課題解決を先導できる人材であると私は考えます。「物事の本質を見極める力」とは、現象として認知可能な事象の奥に潜む、その事象のカギとなるもの、そしてその仕組みを見極める力を意味しています。この力の基盤となるのは、特定の分野をとことんまで究めた高度な専門性です。大学が最先端の研究を行い、それに基づく高度な専門教育を行う意義はここにあるのです。

また、物事の見方の転換も重要かもしれません。例えば、科学技術の力で自然を征服するという発想ではなく、如何にすれば人類は自然と共生できるかを真剣に考える必要があります。また、老・病・死など人間が避けて通れない問題も、今までは生命科学や医学の発展により克服するという姿勢で研究が行われてきました。しかし、そのような発想を転換し、どのようにすれば人類はこれらの問題と共生し、心安らかな人生を全うできるかを、見つめなおす必要もあるでしょう。このように、物事を見る時一面から見るのではなく、複眼的に様々な観点から見る必要があります。

これらの視点を養うのは、幅広い教養教育です。教養教育は単に知識の蓄積ではな

く、広く柔軟な視点の獲得に繋がるものとして重要です。

輝く「世界適塾」を目指して

176年前に設立された「適塾」を原点として、「懐徳堂」の精神を受け継ぎ、大阪府民の熱意に支えられた本学は、2031年には創立100周年を迎えます。その時大阪大学は、「世界適塾」として世界でトップ10に入る研究型総合大学になることを目指しています。176年前の適塾には日本各地から志ある若者が集まり、大いに勉学に励み、適塾で学んだ新しい知識や技量を携え、再び全国に散らばり明治維新の新しい時代を切り開きました。

「世界適塾」には、国内はもとより世界中から研究者や留学生、向学心溢れる人たちが大阪大学の学問と研究を目指して集まり、学問や研究を究め、やがて大阪大学から世界中に羽ばたいていきます。世界適塾元年である記念すべき年に入学された皆さんは、本日より、私たちと一緒にこの大阪大学の大きな夢に向かって新たな歴史の1ページを共に書き継ごうではありませんか。

平成26年4月2日
大阪大学総長 平野俊夫

大学 × 学生 × 世界

阪大なでしこ

官民協働海外留学支援制度～トビタテ! 留学JAPAN 日本代表プログラム～
大阪大学から7人が留学

法学部
国際公共政策学科3年
中嶋沙蘭

U.S.A.

文学研究科
文化動態論専攻修士2年
北岡志織

Germany

外国語学部外国語学科
ビルマ語専攻3年
齊藤小夏

Myanmar

医学部医学科5年
相川恵梨子

England

法学部
国際公共政策学科3年
対馬ひとみ

Canada

外国語学部外国語学科
英語専攻3年
森 裕美

U.S.A.

外国語学部外国語学科
ロシア語専攻3年
平野美優

Russia



日本人学生の海外留学の後押しのため、今年度から、官民協働海外留学支援制度～トビタテ! 留学JAPAN日本代表プログラム～がスタートした。多様な活動の認定と返還不要で従来の2倍の金額の奨学金、事前・事後研修、留学生ネットワークなど手厚いサポートが大きな特徴だ。第1期の募集には全国から221校・1700人の学生が応募。全国で323人、阪大からは7人の女子学生が選ばれた。平野俊夫総長が世界にチャレンジする「阪大なでしこ」たちを激励した。



世界にチャレンジ

女子7人は阪大の元気の象徴

総長 「トビタテ! 留学JAPAN日本代表プログラム」の最終選考を勝ち抜いたのは、全員女性なのですね(笑)。阪大の女子学生は本当にたくましいと思います。皆さんは阪大の代表、日本の代表として世界にチャレンジされるわけで、大いに期待しています。今日は留学に関する目標や今後の夢などをうかがいたいと思います。簡単な自己紹介からお願いします。

相川恵梨子 医学部5年です。「自然科学系、複合・融合系人材コース」で採用されました。英国のキングス・カレッジ・ロンドンに来年1月から3か月間留学し、附属病院遺伝子皮膚病グループで実践を学ぶ予定です。春休みとクリニカルクラークシップ(臨床参加型実習)の期間を利用して、留学します。

齊藤小夏 外国語学部3年、ビルマ語専攻です。「新興国コース」で今年12月から10か月間、ミャンマーのヤンゴン外国語大学ビルマ語学科に語学留学します。

平野美優 外国語学部3年、ロシア語専攻

です。私も「新興国コース」で、8月から12か月間、ロシアのサンクトペテルブルク大学ジャーナリズム・マスコミュニケーション学部留学します。その後ウズベキスタンで、日本語教育など草の根交流を行っている「リシタンジャパンセンター」での1か月間のボランティアに携わる予定です。

森裕美 外国語学部3年、英語専攻です。「世界トップレベル大学等コース」で、9月から9か月間、米国・カリフォルニア大学サンタバーバラ校・教養学部コミュニケーション学科で、交換留学生として学ばせていただきます。

対馬ひとみ 法学部3年、国際公共政策学科に所属します。私も「世界トップレベル大学等コース」で、9月から8か月間、カナダのマックマスター大学・社会科学部に交換留学させていただきます。

中嶋沙蘭 同じく法学部3年、国際公共政策学科です。「多様性人材コース」で、来年1月から1年間、米国・ジョージア大学・国際関係学部もしくはテキサスA&M大学国際関係学部で交換留学生として学ぶ予定です。

北岡志織 文学研究科修士2年、文化動態論専攻です。外国語学部出身でドイツ語を専攻していました。「多様性人材コース」で、9月から11か月間、ドイツのハンブルク大学・人文科学研究科ドイツ文学専攻に所属しながら、Bluespots Productionsという演劇カンパニーでインターンとして働きます。

留学で何を学ぶか

総長 阪大の原点は、緒方洪庵の適塾です。そして今、世界から人を集め交流する「世界適塾」の実現と、学問による調和ある多様性の創造をめざしています。皆さんも今回のチャレンジで、きっとそのような体験ができるものと信じています。留学に向けて皆さんは、どのような夢を持っていますか。

相川 MD研究者育成プログラム(未来の医療を切り開く医学研究者を育成する)に所属しています。キングス・カレッジ・ロンドンを選んだのは、病院と研究所、医師と医師以外の研究者が一体で活動しているという先進的な研究・治療システムを、ぜひ見学したいと思ったからです。

大学 × 学生 × 世界

トビタテ!
留学JAPAN
その経験が、未来の自信。



相川恵梨子さん 平野美優さん 齊藤小夏さん

皆さんからは
自分の夢を自分でつかみ取り
実現するエネルギーを感じました



平野俊夫総長

阪大でして
世界にチャレンジ



森 裕美さん 北岡志織さん 中嶋沙蘭さん 対馬ひとみさん



齊藤 ビルマ語専攻なので、ミャンマーで学ぶことにより、しっかりとビルマ語を話せるようになりたいと思いました。またミャンマーは、軍事政権による民主化が図られているようですが、現在どのような状況なのかを自分の目で確かめたいです。私のビルマ名(ビルマ語専攻の学生はビルマ名を授与される)は「スーチー・シエ」なので、アウンサンスーチーさんにも会えたらうれしいです(笑)。アジアが好きなので、将来は東南アジアに関わるような仕事ができればと考えています。

平野 サンクトペテルブルク大学でジャーナリズムを学ぶのは、もともと国際協力に興味があり、途上国などでは市民の声が政府に届いていないことに注目したからです。アルバイトをして毎年海外に出かけていて、これまでにイギリスやバングラデシュにも行きました。今回の留学先としてロシアを選んだのは、中央アジアやチェチェン紛争に興味があったからです。

森 コミュニケーションについて学べる留学先を探しました。阪大の外国語学部でもコミュニケーション関連の科目はありますが、私は今、カ

リフォルニア大学からの留学生のサポーターをしていて、彼らのエネルギーに圧倒されています。そのようなエネルギーな大学に身を置いて勉強し、将来は自分の学んだことを大学や社会に還元できればと思っています。

対馬 主に国際関係に興味があり、国際公共政策学科でも紛争などについて学んでいて、カナダでは「平和学」を中心に勉強したい

と思っています。カナダは「人種のモザイク」と言われるように移民が多く、多様な意見や考えが存在する国。そのような国の大学で、広い視野を持って平和学を学べたらと思いました。

中嶋 高校生の時(2010年)、エジプトのカイロで開催された「平和の祭典アートマイル MURAMID 展」に日本ユースとして派遣され、楽しく魅了されました。今ゼミなどで地域紛争



応援団から阪大でしこたちにエールが送られました

について学んでいますが、将来はパレスチナなど中東の平和構築に貢献したいと思っています。そのためにも、中東に影響を持つアメリカの大学で、アメリカの外交政策について学びたいと考えました。

北岡 ドイツ語をツールとして自分にできることを考えた結果、ドイツ現代演劇を研究しておられる市川明先生の演劇学研究室に入り、演劇の理論と実践を学びました。また今年2月、ドイツのアウグスブルクで行われた国際的マルチメディア演劇プロジェクトに参加し、字幕やドイツ・アメリカ・日本(阪大)の3劇団のアテンドスタッフを務めました。現代劇と能を融合させた市川先生演出の作品は高く評価され、その時、演劇を通して文化交流ができるのではと感じ、ドイツの大学で学びながら演劇カンパニーで研修しようと思いました。

阪大生はもっと異文化体験を

総長 皆さんしっかりしていて、非常に頼もしいですね。今回の留学以前にも海外経験が豊富ですし、皆さんのような学生がいれば、

阪大は必ず世界トップ10になれると感じます。ところで皆さんは、なぜ「トビタテ!留学JAPAN」に応募しようと思ったのですか。阪大生がもっと多く留学するためには、どうすればよいと思いますか?

森 「トビタテ!留学JAPAN」の1期生ということで、何か新しいことができるのではないかといい思いがありました。それに奨学金など金銭的なサポートも大きな魅力でした。

齊藤 外国語学部の学生は、留学への意欲が強いのが特徴です。キャンパスや学部を超えたつながりがあれば、男子学生を含むもっと多くの学生が応募するのではないのでしょうか。

北岡 今回の応募にあたり、文学部の国際連携室に毎週のように通い、すぐお世話になりました。親身になってサポートして下さる職員の皆さんがいて、経済的にも手厚いサポートがあるのに、この留学制度を利用しないのはもったいないと思います。そういうサポートがあることをもっと知ってもらえたらと思います。留学には不安もありますが、得られるもの大きさを考えるとワクワクします。

夢を自分でつかみ取る

総長 皆さん、留学に対する本気度が違いますね。阪大のキャンパスにいても多様な知識は得られますが、「百聞は一見に如かず」。海外に行き、こういう考え方があるのか、こういうことが世の中にあるのかという異なる視点を得ることはとても大事です。将来どのような分野に進むにしても、いろいろな見方を知ったうえで、これが正しいという本質を見極めてほしい。それは、皆さんの将来にとっても次世代の社会にも大切です。不可能と思われることも、挑戦し続けていると必ず現実になります。皆さんからは、自分の夢を自分でつかみ取り実現するエネルギーを感じました。頑張ってください。

第2期生の募集が10月初旬に行われる予定です。今回は阪大の男子学生も大勢応募して採用されるよう、ぜひ皆さん、どうすれば採用されるかというメソッドを含めて、大いに他の学生にも宣伝してください。

全員 今日はありがとうございました。

元気です! 阪大生

2013年9月発行
大阪大学ニュースレター61号 掲載

「貴重な経験で、自分も成長できた」 高校教員を目指して

全選手にこの大会を、
大阪を楽しんでほしい



4×400Mリレーに出場したメンバーと

大阪大会会館講堂で行われた七大会の開会式

力走する井上さん

北海道大、東北大、東京大、名古屋大、京都大、阪大、九州大の体育会が毎年持ち回りで開催する「全国七大学総合体育大会」。第52回の2013年は、阪大が主管校となり、一部の冬季春季競技を除き6~9月、大阪を中心に展開している。阪大は第49~50回での連覇を含め計7回の優勝を誇る。大会実行委員長を務める基礎工学部4年、井上慎弥さんは、43種目、8000人近い選手を束ね、「すべての選手、学生に七大会を、大阪を楽しんでほしい」と、炎天下を駆け回っている。



井上 慎弥
基礎工学部4年生
七大会主管校実行委員長

いのうえ しんや 三重県立伊勢高校卒業。「旧帝大の総合大学で、幅広い視野を届けたい」と、阪大に入学。基礎工学部では情報科学数理科学コース。七大会の大会理念は「真のアマチュアリズムの追求」「学生による自主運営」「競技レベルの向上」「他大学との親睦をはかる」「運営費の削減」。

高校から陸上競技に打ち込む井上さんは、阪大陸上部でも練習に励む一方、1年生の夏から体育会本部員として運営にも貢献。勉強、スポーツそして体育会活動と「3足のわらじ」、どれもおろそかにすることはなかった。

3年生になるころ、大きな峰をぼんやり意識しはじめていた。「自分が4年のときに、阪大が主管校になる。責任は重いけど、7年に1度の機会を委員長としてやり遂げたい」。立候補して、その重責を担うことになった。そのため、3年次

までに大半の単位を取得。教員採用試験の勉強も春休みに済ませた。そして2013年は大会の準備から本番まで、全力投球している。決して華々しい舞台ばかりではない。七大会の役員が集まる会合では、議長として意見をまとめる難しさを痛感した。競技運営の方法などについての議論。あらかじめシミュレーションをしてから臨んでも、そもそも論、価値観の違い、議論の脱線と迷走する会議を着地させるのが本当に大変だった。「でも、普通の学生では味わえない苦労、特別協賛として支援して下さる学士会のご担当者をはじめ、社会や大人と向き合う経験などが、僕自身を成長させてくれた」と、笑顔で話す。

吹田キャンパス陸上競技場が2013年7月、人工芝に生まれ変わった。2012年の七大会・開会式レセプションで、井上さんが平野俊夫総長に「阪大生は頑張っているの、体育施設を充実してほしい」と「直訴」したことが、実った形となった。2013年の開会式レセプションで平野総長から「私はやるだけのことはやった、今度は選手のみなさんが頑張る番だ」と返され、ますます奮情している。

陸上部の4年生は、七大会が引退試合となるので、毎年感動的な幕切れを迎える。井上さんも、この3年間で着実にタイムを伸ばした400Mと、七大会を運営したメンバーで組んだ4×400Mリレーに出場し、よい緊張感を味わいながら悔いなく走ることができた。運営と競技の両方で七大会を楽しむことができ、ますますこの大会が好きになった。「後は最後まで運営に集中し、やり抜く」と決意する。

将来は、地元・三重の高校教師になるつもりだ。高校陸上部の顧問が、練習の合間に人生論を聞かせてくれたことが大きかった。「生徒の成長を手助けすることで、教師自身も成長していく」。その言葉が大好きだ。今大会の開催と平行しながら、教員採用試験を1次、2次と踏み越えてきた。大会の終わるころ、「合格」の朗報が舞い込むことを祈っている。「高校数学の教師として、陸上部の顧問として歩んでいくために、卒業までの半年間に自分の引き出しをいっぱい埋めていきたい。大阪大学という総合大学で学べることを誇りに、文系を含めたいろんな授業を受けて、自分を磨く」と、さらなる目標を掲げている。

元気です! 阪大生

2013年12月発行
大阪大学ニュースレター62号 掲載

「より速く」をめざし 挑戦を続ける

設計、製作から実走まで クルマづくりを満喫

工学研究科・機械工学専攻 博士前期課程 1年生
佐藤俊明



■OFRAC (Osaka-univ Formula RACING Club) 2002年に結成された学生主導のレーシング・クラブチーム。「全日本学生フォーミュラ大会」には2003年の第1回から継続参戦し、2010年の優勝をはじめ、近年は6年連続で6位以内の入賞を果たしている。



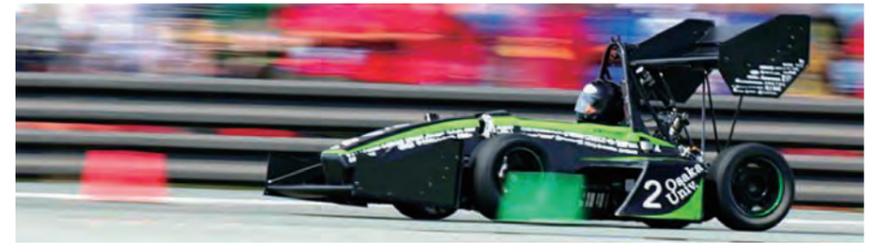
OFRACのメンバーと自分たちの手で製作したレーシングカー

学生が自ら構想・設計・製作したレーシングカーを通し、ものづくりの総合力を競い合う「全日本学生フォーミュラ大会」。2013年は僅差で2位だったが、すでに2014年に向けた設計が始まる。活動で得たネットワークやフォーミュラ大会の魅力を、OFRAC (大阪大学フォーミュラレーシングクラブ)の2013年度プロジェクト・リーダー、佐藤俊明さんに聞いた。

2013年9月3日から5日間、静岡県の小笠山総合運動公園エコパで開催された第11回全日本学生フォーミュラ大会には、海外勢も含め78チームが参加。その中でOFRACは、総合成績で2位という好成績を挙げた。プロジェクトリーダーの佐藤さんは「2014年こそは総合優勝したい」と抱負を語る。

競技は1000点満点。設計、コスト精度などを問われる「静的競技」と、コース走行の速さや燃費を競う「動的競技」がある。1000ページにも及ぶコストレポートを作成する必要も。工学系の学生がそろそろOFRACが得意とするのは、やはり設計である。

2013年は車体の前後にウイングをつけた。車体が重くなる一方、高速走行時の旋回性能が向上する。シミュレーション結果をもとに、トータルでメリットがあると判断。「『より速く走る車』が、私たちの設計に対する考え方。年々工夫を重ね、ウイングは必要不可欠と判断しまし



た。搭載初年度となった2013年の完成度は100%とは言えませんが、挑戦したことは将来への財産になったと思います」

ドライバーも務めた佐藤さんは「小型でもレーシングカー。最高速度は150キロ程度ですが、スタート直後の加速性能だけをみるとどんな一般車よりも速い。地面が非常に近く、体感速度は実際の何倍にもなります」。最終種目の耐久走行は過酷で、完走できた車は約半数だったそうだ。

大会に参加して得たものは「車に関する知識だけでなく、思考力やチーム運営力、お金の使い方やタスク管理なども。また、企業の方にスポンサー協力をお願いする際に、「社会人」を経験できます」。

もっと海外の大会にも出たいと思っている。「欧米のトップレベルに対しては遅れをとっている部分がある。なんとか資金的な問題を解決して、世界のトップレベルの学生チームが集う欧米の大会にも参加したいですね」将来はこの活動で得られたものを生かして、自動車業界で社会に貢献するのが夢だ。

元気です! 阪大生
「ショセキカ」プロジェクト

2013年12月発行
大阪大学ニュースレター62号 掲載



ドーナツを穴だけ残して食べる方法

阪大生がつくる 魅力的な書籍

学生が主体で、大阪大学出版会と協働して魅力的な書籍作りを企画・広報・出版まで展開する「ショセキカ」プロジェクト。2014年2月に「ドーナツを穴だけ残して食べる方法～大阪大学ドーナツ論議～」を出版するまでに漕ぎ着けた。参加した学生からは、「大阪大学ではいろいろな企画が自分たちでできる。この楽しさを後輩にも味わってほしい」と受験生にメッセージを送る。企画から販売まで学生が主体となる書籍作成は、大学出版部では全国初の試み。「学生の知恵・経験・思いが、書籍を通じてどう伝わるのか」に各業界から注目が集まっている。



学生たちのアイデアが詰まったラフ案



授業で企画準備、自主性高まり

このプロジェクトは12年4月にスタート。大阪大学出版会の創立20周年の企画としてのサポートもあり、10月には本格的な講義(基礎セミナー)「本をつくる」が開講。文理問わず学部生・院生も含め約30人が受講した。

当初は、「講義の模様を書籍化できたら」という教員の思惑でスタート。しかし学生から、「自分たちの提案で書籍の内容も決めたい」という流れができた。そして、講義が終了した今も学生有志がプロジェクトを継続している。指導する全学教育推進機構の中村征樹准

教授(科学史)は、「与えられたことをする講義ではなく、遠い目標に向けてすぐに結論の出ない緊張感、モノ作りの責任感をはぐくめた。彼らのイメージはどんどん広がり、教員が思っていた枠を超えました」と手応えを感じている。

プレゼンで厳しい審査、真剣に

講義では、フリー編集者、新聞社代表や阪大出身の書店員から書籍の魅力や、本が店頭と並ぶまでの工程に関する講義を受けた。その後、自分たちで出版したい企画を4グループに分かれて準備し、実際に出版する企画を決めるコンペを実施し、それぞれ10分の



中村征樹准教授

発表をした。出版会や大手書店で構成した審査員による別室での審査会議後の講評では「詰めが甘い」など辛辣な意見もあったが、「ドーナツ」など二つの企画が残った。

その後、提案内容を改善し、大阪大学出版会の出版委員会でプレゼンに臨んだ。学内の教授が務める出版委員たちは、コンペ以上の厳しい基準で、内容の充実度や「売れるか否か」を判定する。厳しい意見がいくつも出たが、それでも学生たちは「読者に買ってもらうには、それに値する本を作らなければならないんだ」と前向きに受け止めた。様々な難所を乗り越え、「ドーナツ案」の出版許可を得た。

企画の確定で苦労したうえ、阪大の先生に原稿を依頼したり、素材がなかなか集まらなかったり、PR方法を探ったりと、学生たちはさらなる試練を経験。そしてついに、A5判、200、初版2000部の「ドーナツ本」の上梓が決定し、一般書店にも並ぶ。

阪大の頭脳でドーナツ論じる

書籍は、「ドーナツの穴」について、阪大の頭脳が工学、美術、精神医学、化学、法学など各専門の観点から「物を切るとは、加工するとはどういうことか」「穴は消失しても記憶は保持する」「人類の精神がいかんして形作られたか」「有害物質PCBをドーナツ型「シクロ

デキストリン」を用いて除去する」「ドーナツの穴を売ってはならない」という法律の有無」といったラインナップで、知識・知見を駆使して解き明かす内容。このほか、学生が先生にインタビューをして執筆した世界各地のドーナツコラムなど、盛りだくさんの内容となる。

同出版会の川上展代さんは「先生方には唐突なお願いでしたが、学生ならではの熱意が伝わってこのような企画に真正面から執筆してください」と感謝しています。普段は読者の立場である学生たちの意見は私にとっても非常に新鮮で、いい本になりました」と仕事の成果を語り、学生たちの「お姉さん」役として付き合ってきた日々を大切に思い返している。



大阪大学出版会 川上展代さん

「阪大生を作った100冊」 紀伊國屋書店と共同で

プロジェクトでは、出版と並行して多彩なイベントも展開。この企画に興味をもった紀伊國屋書店側が「何かお手伝いできることがあれば」と声をかけてくれた。そこで、阪大生はどんな本を読みながら育ち、感動を覚え、学んでいるのかを探る「阪大生を作った100冊」を企画。学内で書評アンケートを実施し107冊が集まった。

そのうちの約90冊が「一冊一会」として10月15日～31日、紀伊國屋書店グランフロント



山口裕生さん (法学部2年生)

大阪店で展示販売された。担当した山口裕生さん(法学部2年生)は、「書籍との出会いなど、いい文章がたくさん集まり、それを反映するブックフェアを催せたのはうれしい。恋愛・友情などのテーマに絞った企画してほしい、などの反響も寄せられた。これからも取り組んでいきたい」と、一層の意欲を見せる。

「阪大生を作った100冊」の書評は、現在も紀伊國屋書店ホームページに掲載。「贈られた本」「大阪に関する本」など5分野に分け、大江健三郎、吉本ばなな、織田作之助、O・ヘンリーといったさまざまな作家の作品や童話などについて、阪大生が熱く語っている。



■紀伊國屋書店 書評ブログサイト「書評空間」特設ページ
<http://booklog.kinokuniya.co.jp/handaishosekika/>

主体的に学べる環境で達成感を得る 貴重な社会勉強にも



「ドーナツ」企画に当初から中心メンバーとして関わっている平野雄大さん(工学部3年生)に、苦労や喜びを語ってもらった。

——この企画はどのように生まれたのですか。
メンバーの一人が、以前インターネット上で話題になった「ドーナツを穴だけ残して食べるにはどうするか」という話を提案したところ、その矛盾のおもしろさにみな飛びつきました。
——企画の準備や、出版作業での苦労は。
企画段階で厳しい批判を受けて、ショックを受けたこともありましたが、出版作業ではまず、先生方への執筆依頼が大変。当初はアポなしで研究室を訪れたので、半分は断られました。依頼メールを送るにしても、敬語の使い方を分からず情けなかったです。でも、これらの経験を通し目上の人に対する礼儀、言葉遣いなどを身につけることができ、いい社会勉強になりました。また、コラム執筆ではイン

タビューの内容を文章に仕上げる難しさも実感しました。でも、全ての作業を通して、普段の学生生活ではできない体験ができたし、何と言っても「自分で本を作ったんだ」という大きな達成感を得ることができました。
——大阪大学を目指す高校生に魅力を。
大阪大学には、学生が主体で行っているイベント、プロジェクトがいろいろあるし、外部とコラボする機会も多い。勉強だけでなく、自分が動けるチャンスがたくさん見つけれられる。さらに何をやるにしても、先生方や職員の方が協力的で、努力を認めてくれる。「何か新しいことをしたい」という意欲的な人には、とてもいい環境の大学です。

出版委員会でのプレゼンの様子

元気で！ 阪大生 2014年3月発行 大阪大学ニュースレター-63号 掲載

ecocon2013で グランプリ環境大臣賞・ 会場賞

大阪大学環境サークルGECS
箕面川の清掃など「楽しく」実績



大阪大学環境サークル「GECS(ゲックス)」が昨年末、東京で行われた第11回全国大学生環境活動コンテスト(ecocon2013)で参加38団体の中から、グランプリ環境大臣賞と会場賞を受賞した。毎年初夏に新入生が地域住民らと行う箕面川の清掃活動が評価されたもの。運営の実行委員を務めた小島健太郎さん(経済学部1年生)と石川由美子さん(工学部1年生)、サークル代表の野村秀成さん(同2年生)が、やりがいや抱負を語った。

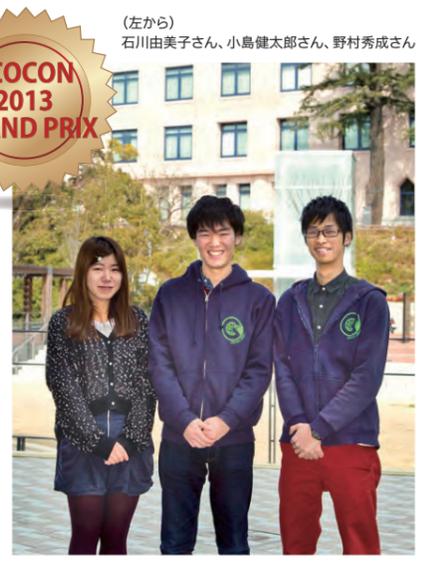
GECSは「G Eco Challengers」の略で、「G」は旧大阪外国語大学の略称「外大」の頭文字。外大のゼミで「キャンパス・エコロジー」に関わった10人ほどの学生らが「大学の環境をよくしよう」と2003年に設立した。大阪大学との統合後08年には大学公認サークルとなり、豊中キャンパスを拠点に「学生の立場から環境問題の改善に貢献する」という理念のもと、学内外で活動している。

てられたビニール傘にペイントをしてキャンパス内に共用傘として設置▽大学に対しての環境対策の提案など、地道ながら大学内外の人たちにも働きかける活動を展開する。

今回の受賞の対象となった箕面川の清掃は、入学して間もない1年生が中心となって、企画から運営までを行う恒例イベント。7回目となった昨年は地域の人たちと学生ら232人が参加し、2時間で約288kgのごみを集めた。5月初旬からミーティングを重ね、劇やクイズなどで楽しみながら清掃をもらうプログラム作り、清掃用具の準備、市役所や地域団体などの



箕面川の清掃活動



(左から) 石川由美子さん、小島健太郎さん、野村秀成さん



対外折衝まで、すべてを新入生が担った。

小島さん、石川さんは、これほど大掛かりなイベントを責任ある立場で行うのは初めて。小島さんは「上流から下流まで下見を繰り返してハザードマップも作りました。雨が続いて心配しましたが、当日は晴れて増水もなく無事に開催できホッとしました」と振り返る。石川さんも「入学早々でまだ大学にも慣れない時期から準備に追われ忙しかったけれど、終えた時は大きな達成感がありました」と話す。



2人とも最初から環境問題に関心が深かったわけではなく、「楽しそう」な雰囲気しかかれてGECSに入ったという。1年間の活動を通して徐々に「きちんと分別する」「無駄なものを買わない」など、生活の中にリサイクルやリユースが身についてきたようだ。

サークル結成から10年がたった節目を迎え、野村さんは「今後はメンバー個々の満足度を上げながら、これまでやってきたことに新しさも取り入れ、活動全体に成果を求めていきたい」と抱負を語っている。

■「ecocon」
全国大学生環境活動コンテスト。学生の環境活動の活性化を通じた持続可能な社会の実現を理念に、環境に関心のある全国の大学生が1年に1度集まり、発表・交流・学習する場。2003年から開催。主催は全国大学生環境活動コンテスト実行委員会

元気で！ 阪大生 2014年3月発行 大阪大学ニュースレター-63号 掲載

阪大から世界をめざす 学生ベンチャーが本格始動！

「暗号化技術」で新ビジネス



独創性の高い技術を武器に、グローバルなベンチャービジネスを展開したい—そんな大きな目標を掲げる大阪大学の学生たちが、夢の実現に向けて動き出した。出身国も専門分野も異なる仲間が始めた新ビジネスが今、キャンパスから実社会へ船出しようとしている。

個人情報保護に貢献する新システム

発端は、王偉さん(理学研究科博士後期課程2年生)が発案した個人情報の暗号化技術だ。第三者による住所の盗み見を防げるのと同時に、印刷数字だけを使用するため誤読を減らせる。安全性が高く、便利な技術だ。王さんはこの技術を使って起業しようと考え、所属する国際物理特別コースの高部英明教授に相談。「宅配業者などを顧客としたB to Bビジネスとして有望だ」と直感し、高部教授が最初の協力者となった。そこに、イスラエル出身でITに詳しいジュリアン・グリンブラットさん(理学部物理学科3年生)も加わり、3人でビジネスプランを固めていった。

その後、同コース所属の周暁さん(理学研究科博士前期課程2年生)、大阪大学法学部出身の知人で法律の仕事に携わる霍婕さんが参加。さらに、日本語での交渉が不可欠と考えた王さんは、ビジネスセミナーで知り合った関屋弥生さん(外国語学部4年生)にも声をかけた。

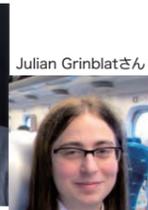
理系、文系、女性、男性を問わず、さまざまな国からの出身者が集まった。暗号化技術を「uuITec(ユーテック)」と名付け、今年1月には日本での特許出願も完了した。

ベンチャーグランプリで準優勝

昨年秋には「University Venture Grand Prix(UVGP)2013」(経済産業省主催)に応募し、準優勝を獲得。想定市場規模の大きさやシステムの安全性などが評価された。また、米国大使館内米日カウンシルの「TOMODACHI(トモダチ)賞」も受賞。その副賞として、この3月にシリコンバレーにおいて投資家へプレゼンテーションを行う機会が与えられた。海外での



高部英明教授



Julian Grinblatさん



(左から) 王偉さん、霍婕さん、周暁さん、関屋弥生さん

- 王偉(Wang Wei ワン ウェイ)さん
理学研究科 物理学専攻 国際物理特別コース 博士後期課程2年生
- 周暁(Zhou Xiao シュウ キョウ)さん
理学研究科 物理学専攻 国際物理特別コース 博士前期課程2年生
- Julian Grinblat(ジュリアン グリンブラット)さん
理学部物理学科 3年生
- 関屋弥生(せきや やよい)さん
外国語学部英語専攻 4年生
- 霍婕(Jie Huo カク ショウ)さん
2013年大阪大学法学部研究科修了。現在は、堺筋総合法律事務所勤務。
- 高部英明(たかべ ひであき)教授
レーザーエネルギー学研究中心 (理論・シミュレーション、実験室宇宙物理)

出資を募り、国際特許を考えている王さんには、願ってもないチャンスだ。

起業後は、王さんがCEO(最高経営責任者)を務める予定だ。キャンパス内の学生ネットワークを使って、社員の募集も開始した。

仲間とともに世界進出!

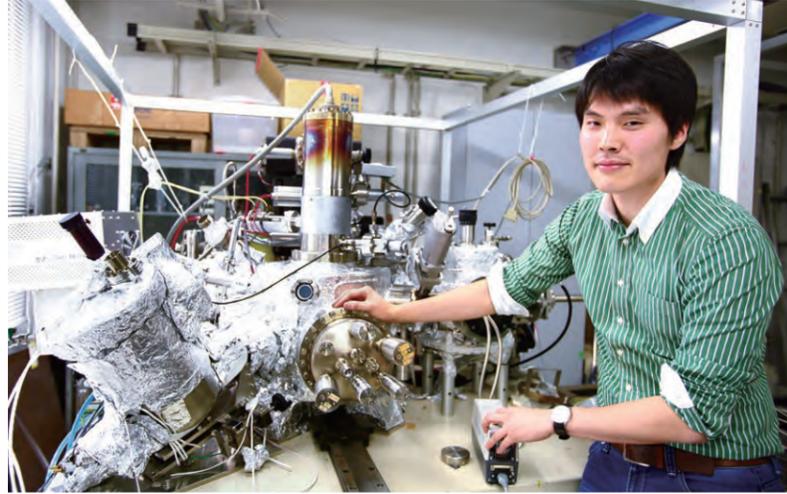
「まずは日本国内でのサービス提供を考えている。その後、欧米や中国、さらにロシアやアジア諸国などへ進出したい」と成長戦略を語る王さん。仲間たちも「自分の持つ技術を生かさせてうれしい。新会社の技術向上に貢献したい」(ジュリアンさん)、「文系と理系の学生が同じ目標に向かい行動する中で、社外への情報発信に取り組みたい」(関屋さん)、「価値ある仕事ができうれしい。精一杯がんばりたい」(周さん)、「日本と中国の潤滑油となるよう努めたい」(霍さん)と、意欲にあふれている。新事業にける一同の夢は、ますます膨らんでいる。

元気です! 阪大生 2014年3月発行 大阪大学ニューズレター63号 掲載

阪大での学生生活を楽しむ

アジアの明日を見つめつつ、

小論文コンテストで「教育税」を提言し大賞



「NRI学生小論文コンテスト2013」授与式 (提供: NRI学生小論文コンテスト2013事務局)

■NRI学生小論文コンテスト
野村総合研究所(NRI)では、「未来創発—Dream up the future.—」という企業理念のもと、未来社会のパラダイムを洞察し、その実現を担うことを使命としている。この一環として、これからの社会を担う若い世代に、日本や世界の未来に目を向け、考える機会を増やす目的で、2006年から開催。詳しくは、コチラ

NRI 学生小論文コンテスト 検索

大賞を受賞したのは、「教育税」を創設してという政策提言。以前から日本、韓国での中高受験の過熱、学費の高騰に危惧の念を抱いていた。「今のままでは『遅咲き』の子どもは実力を発揮しにくい。親の経済状態次第で子どもの進路が決まってしまう」と考え、子どもたちの未来を家族だけでなく国が今以上に支援できるようにするための手段として、新しい税の導入を提唱。小論文作成にあたっては、日本の税法や税収状況などを調べ、想定税負担額も試算した。集めたデータの多様さ、優れた分析の視点、日本語の完成度の高さなどが受賞のポイントとなった。

鄭さんが「日本の大学で学びたい」と考えるようになったのは高校時代。「漠然と日本留学に憧れて」留学生プログラムに気軽に応募したところ、その受け入れ先が大阪大学だった。専門科目と日本語の予備教育の後に入学。基礎工学部を選んだのは、「理学と工学の間にある学問という位置づけがユニーク」と思ったからだ。

現在は博士前期課程2年。基礎工学研究科・システム創成専攻電子光科学領域の酒井朗教授の研究室に所属し、電子材料グラファイトとアルミニウムの接合面を原子レベルで観察する研究に取り組んでいる。「自分の研究をLOVEせよ!」酒井教授の言葉が印象的だと微

笑む。修士レベルの研究ではテーマをある程度与えられる場合が多いが、その中でも自分自身でその研究の価値を見出すことが重要。そうすれば他の研究テーマにも通じる物事への考え方が身に付く。鄭さんも同感だと話す。

鄭さんがめざす将来像は、経営コンサルタントになって、世界を牽引するアジアのモノづくりを多様な側面からサポートすることだ。「アジアの製造業が活気づけば、雇用創出も大いに期待できます」。21世紀はアジアの時代といわれている。「この時代に韓国に生まれ、日本で学べることは本当に幸運。この好機を十分に生かしたいです」

日本で快適に暮らすためのポイントを聞くと「日本語を話すこと」が答えだった。英語が話せれば大概理解してもらえるし、研究は英語だけでも進められる。だが「親しくなるには、その国の言葉を知ることが大切。多くの人と交流できるようになります」

日本人学生に対しては「もっと海外からの学生に話しかけてほしい」と希望する。「慣れない外国暮らしの中でも、ちょっと笑顔で接してもらえると安心できます」と語り、鄭さん自身は周囲の人々と自然につきあっている。「この居心地のよさを、他の外国人学生にも味わってほしいと思います」



基礎工学研究科 博士前期課程2年生 鄭祥教

チョン サンギョ 2005年秋、日韓共同理工系学部留学生プログラム(KOSMOS)履修生として来日。06年基礎工学部入学、10年卒業。12年基礎工学研究科博士前期課程に入学。

元気です! 阪大生 2014年6月発行 大阪大学ニューズレター64号 掲載

部員不足を跳ね返し、新しい時代へ

阪大を元気にする「応援団」

リーダー、吹奏、チアリーダーの3部から構成される大阪大学の応援団。大学行事やクラブ活動を盛り上げる存在だが、現在部員数はたった4人である。存続の危機にある中、それでも前を向いて活動を続けている団員の声を聞いた。

- 外国語学部1年生 石井里奈
- 外国語学部2年生 西浦千晴
- 医学部5年生 光吉礼人

阪大ニューズレターが初の女性応援団長となった岩井真紀さん(第47代団長)を採り上げたのは2009年。その時、部員数は27名だった。それが激減したのは理由がある。09年当時1年生だった光吉礼人さんによれば、「東日本大震災のあとパフォーマンスを自粛。その影響で次の年の入団者が1人になってしまったのです」

応援団の場合、一度減った人数を回復するのは難しい。「他のクラブと違って、入学式などで演舞を見せ、そこで興味をもった人たちを誘い込まないといけないから」だ。副団長の西浦千晴さんは「少ない人数でやっていると、友達から『何をしているのか、分からない』と言われることもある」と残念がる。団員の減少は阪大だけの現象ではない。国公立系の大学はどこも苦戦しているという。



日々は充実している。団長の石井里奈さんはチアリーダー部。「応援を通じて誰かを勇気づけられることが魅力」と語る。そして「吹奏部は音楽、チアならスタンプやスマイル。応援団3部がそれぞれの特徴を生かして大学の活動を盛り上げているのです」

吹奏部に所属する西浦さんは「一生懸命何かに取り組めるところ。応援しているチームが負けたら、本当に悔しい。一喜一憂できることが、魅力だと思います」と笑顔を見せる。

先輩・後輩のつながりが強い。新歓コンパ、追い出しコンパは、50代、60代のOB、OGも集まってにぎわう。今年も入学式も、OB、OGの力を借りて10人ほどの人数を確保することができた。「年上の方と話す中で、社会に出ても困らない礼儀も身につくと思います」と西浦さん。

石井さんは、応援される側の事情に合わせ、もっと多様な応援スタイルを考案していき



(左から)光吉さん、石井さん、西浦さん

- いしいりな 大阪大学応援団第54代団長。大阪城ホールでの入学式で、応援団の演舞を初めて見て感銘を受け、入団。チアリーダー部。
- にしうらちはる 副団長。応援団の卒業生が作る受験生応援プロモーションをWEBで見たことが入団のきっかけ。吹奏部。
- みつよしひろと 第50代団長。現在も吹田キャンパスの近くの民間のチアリングクラブで活動中。

たいと思っている。「例えば、文化部のイベント応援にも行くなど、もっと活動の幅を広げていきたいですね」

今もチアリングの活動を続ける光吉さん。大学の応援団とは違う応援の形があることを、引退してから知った。「チアリングクラブでは『とにかく笑う。楽しく』がモットー。そういう応援の良さを感じるようになりました。それに比べると、大学の応援団は少し硬すぎるかな」とも考える。

現在、京都大学では大学祭の前夜祭を応援団が主催している。自分たちも阪大を盛り上げる独自の発信をしていきたいと、前を向く。「大学の協力を得ながら、阪大のファンが増えるような企画・提案がしたい」と語り合う3人。時代の中で変化していく、応援団の今後に注目したい。



2014年6月発行
大阪大学ニュースレター-64号 掲載

堂々と、熱く

学生の自主的な課外研究を奨励 初の成果発表会を開催



未来基金支援事業

平成25年度
課外研究奨励事業研究成果発表会

鳥人間コンテスト、ロボコン出場から長期災害ボランティアまで多彩に—平成25年度課外研究奨励事業研究成果発表会が5月2日、大阪大学会館講堂で開かれ、9グループが研究成果をプレゼンテーションした。今までもいちょう祭の開催に合わせてポスター発表の形式で行われていたが、「これだけ学生が頑張っている立派なものなのだから、せっかくなら大きな会場で発表してもらってはどうか」という平野俊夫総長の発案で実現した。会場では学生の熱演に温かい拍手が響いていた。

課外研究奨励事業は、学部学生に自主的、独創的かつ意欲的な研究を奨励することを目的に平成12年度から行われていて、14回目になる。今回は26件の応募があり、このうち選ばれたグループごとに上限100万円の奨励金が総長から贈られる。

発表会では、グループ代表者が7分の持

ち時間でパワーポイントを使って進行。それぞれの質疑応答では活発な意見交換が行われ、大きな笑いに包まれる場面もあった。教員や博士課程教育リーディングプログラム履修生が審査員を務め、発表に対する講評が述べられる。法学部グループの「企業間紛争への解決アプローチ」については、「コミュニケー



ション力が試される大学対抗コンペティションという大会に立ち向かい、いい経験になったと思う」「教養を深めるなどさらに人間力を高め、力を伸ばしてほしい」「後輩ら次世代につなげてもらいたい」と評価・要望が示された。理学部グループの「人力無尾翼飛行機」に対しては「無尾翼というのがユニークで、鳥人間コンテストでの活躍が期待できる」「他のまねをするのではなく、新しい分野に挑戦しているのが素晴らしい」などの意見が出された。

大阪大学が「創立100周年を迎える2031年に世界トップ10入り」を掲げるなかで、外国語学部のグループは「阪大が世界10指に入るには」をテーマに挙げ、香港の大学と比較研

究した。「メンバー全員が1年生で、入学間もなく仲間を募って応募したという意気込みがいい」「トピックスを突いた切り口で、逆に教えられる思いがした」と評価を得た一方、「香港は公用語が英語。非英語圏の国との比較も必要」などと指摘も受けた。

最後に岩谷良則・学生生活委員会委員長は「面白かった。金賞を獲ったフォーミュラレーシングクラブは、全日本学生フォーミュラ大会で参加77チーム中2位という総合成績を収めており、文句なしの受賞。全体としては理工系、文系の応募が増えたことを喜ばしく思う一方、医歯薬系の応募増も期待したい。初めての発表会は大成功で、来年以降も継続したい」と講評した。

サイエンス・インカレ表彰報告や 教養教育優秀者、専門教育優秀者の 表彰も

発表会の終盤には、文部科学省主催の第3回サイエンス・インカレで表彰された5人が紹介された。代表して奨励表彰の五十嵐拓哉さんが「細胞表面へのタンパク質ナノ薄膜形成によるES細胞由来3次元ヒトベースメーカー組織の構築と移植」について研究内容を報告した。

この日は、教養教育や専門教育で優秀な成績を収めた学生も集まり、それぞれ優秀者表彰を受けた。

課外研究奨励事業研究成果発表会 出場者 ※（ ）内は代表者の所属学部・学科

金賞	学生フォーミュラ車両を用いた実走行データに基づくタイヤ特性の分析およびそれに伴う車両運動の解析(工学部・応用理工学科)
銀賞	遺伝子工学を用いた原核多細胞生物の作成～国際合成生物学コンテストiGEMへの挑戦～(理学部・生物科学科)
銅賞	低速・低出力の人力無尾翼飛行機による長距離飛行を目指して(理学部・物理学科)

●レゴで原寸大まちなワニロボットを作ろう～レゴブロックを用いたロボット製作による空間認知能力とデザイン力の向上に関する研究～(理学部・数学科)

●阪大が世界10指に入るには～香港の大学はなぜ強いのか～(外国語学部・外国語学科)

●災害復興過程における長期ボランティアの果たすべき役割について—岩手県九戸郡野田村の事例から—(法学部・国際公共政策学科)

●NHK大学ロボコン優勝を目指して(工学部・電子情報工学科)

●在日コリアンの問題に関してコリアンタウンにおけるフィールドワークと有識者へのインタビューを通じた研究(法学部・国際公共政策学科)

●国際化する社会における企業間紛争への解決アプローチを探る(法学部・国際公共政策学科)

▶サイエンス・インカレ表彰者は、108ページに掲載



サイエンス・インカレ表彰報告の様子

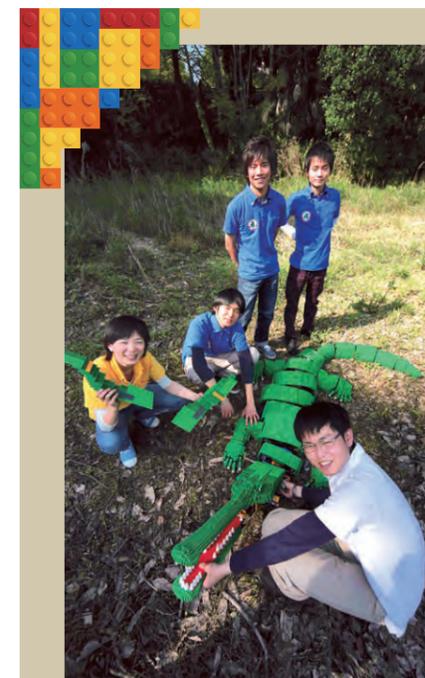


課外研究奨励事業研究成果発表会



受賞者全員で記念撮影

課外研究奨励事業研究成果発表会及び 大阪大学未来基金専門教育優秀賞授与式



阪大レゴ部のメンバーとマチカネワニのロボット

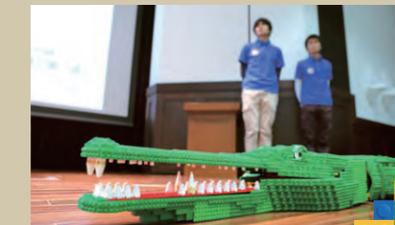
マチカネワニをレゴ®ブロックで作成 初の共同作品で「歩行動作にも挑戦したい」

阪大レゴ部のメンバーたちも、発見50年を迎えるマチカネワニのロボットをブロックで作成するプロジェクトで、9組の中に参加。この発表後には、いちょう祭で駆動する姿も披露、来場者たちから大きな反響を得ていた。

ロボットは顎、胴体、しっぽを動かすことができる。全長約3cmだが、強度などの問題を克服すれば、実物大に仕上げることも可能という。レゴ®ブロック以外の材料は使わず試行錯誤して強度を確保。体型の曲線を出すのが難しく、薄いパーツをたくさん使って工夫した。発表で壇上に立った大迫聡さん(工学部2年生)は「歩行動作もできるように挑戦したい」と抱負を語った。

レゴ部は活動歴3年の任意団体で、大学からの公認を目指し、参加型イベントと作品展示会を開催している。部室がないためこれまでは個人製作がメインだったが、

分割して製作・収納できるよう随所に工夫を凝らし、初めての共同作品を完成させた。「ニュースレター」表紙撮影のため、豊中キャンパス・中山池のほとりにワニを移して組み立て直すのに1時間ほどかかったが、学部生の指導にあたった中山かなさん(基礎工学研究科博士後期課程2年生)は「マチカネワニが池の横にたたずんでいる姿は素敵」と、感動していた。作品は大阪大学総合学術博物館で7月から展示される。



2013年7月発行
阪大NOW137号 掲載

阪大・大工大合同チームJoiTech RoboCup 2013 ヒューマノイドリーグ アダルトサイズ部門で優勝

工学研究科の浅田稔教授が率いる阪大・大工大合同チームJoiTechが、オランダEindhovenで2013年6月26日～30日まで開催されたRoboCup 2013 ヒューマノイドリーグアダルトサイズ部門にて優勝しました。それとともに、その年の大会で最も貢献したヒューマノイドに授賞されるルイ・ヴィトンベストヒューマノイド賞も併せて受賞しました。



平野俊夫総長へ審査結果を報告(2014年1月)



2014年4月発行
阪大NOW140号 掲載

大阪大学学生チーム「CODDRESS」が 全国ベンチャー企画コンテスト で準優勝

大阪大学の学生チーム(CODDRESS)が、2013年12月に早稲田大学で開催された「University Venture Grand Prix 2013」(経済産業省主催)の最終審査で準優勝に輝きました。また、同時に米日カウンシルがスポンサーのTOMODACHI賞を受賞。副賞として、メンバー全員がシリコンバレーへ招待され、1週間にわたる起業の勉強や投資家への説明の機会などが与えられました。

- 大阪大学CODDRESSメンバー
- 王伟(Wang Wei)さん 理学研究科 物理学専攻 国際物理特別コース 博士後期課程2年生
- 周曉(Zhou Xiao)さん 理学研究科 物理学専攻 国際物理特別コース 博士前期課程2年生
- Julian Grinblatさん 理学部物理学科 3年生
- 関屋 弥生さん 外国語学部英語専攻 4年生
- 霍 嬋(Jie Huo)さん 2013年大阪大学法学研究科修了。現在は、堺筋総合法律事務所に勤める。

2013年10月発行
阪大NOW138号 掲載

第11回全日本学生フォーミュラ大会で、 大阪大学チームOFRACが総合2位



デザイン(設計)審査で1位となった本学のフォーミュラカー

大阪大学チームOFRACのメンバー



2013年9月3日～7日まで、静岡県のエコパ(小笠山総合運動公園)で開催された第11回全日本学生フォーミュラ大会で、大阪大学チーム(OFRAC 学生24人で構成)は、総合成績で僅差の2位(78チーム中)となり、国土交通大臣賞や特別賞なども受賞しました。この大会は、学生が自ら構想・設計・製作した小型レーシングカーにより、ものづくりの総合力を競い、産学官民で支援して、自動車技術ならびに産業の発展・振興に資する人材を育成するために毎年開催されているものです。参加した学生からは、「僅かの差で優勝を逃したのは、悔しいですが、2014年の総合1位に向け動き始めています」と力強い言葉が聞かれました。

2014年4月発行
阪大NOW140号 掲載

第3回サイエンス・インカレにおいて 大阪大学の学生5名が表彰

2014年3月1日(土)、2日(日)、幕張メッセ国際会議場で文部科学省主催の第3回サイエンス・インカレが開催され、本学から5名の学生が表彰されました。

サイエンス・インカレは、全国の理系学生に自主研究を発表する場を設けることにより、理系学生の能力・研究意欲を高めるとともに、課題設定能力、課題探求能力、プレゼンテーション能力等を備えた創造性豊かな科学技術人材を育成することを目的として開催されているものです。



サイエンス・インカレ奨励表彰	
工学部応用自然科学科4年生 五十嵐拓哉	●「細胞表面へのタンパク質ナノ薄膜形成によるES細胞由来3次元ヒトベースメーカー組織の構築と移植」
工学部応用理工学科4年生 田村 直也	●「酸化・還元法を用いた金属表面への微細構造作製による放射熱吸収材料の創製」
工学部応用自然科学科4年生 寺垣 歩美	●「シクロデキストリンゲルの不斉空間を用いた光学分割」
理学部物理学科2年生 岩切 秀一	●「高分子溶液の相分離温度に対する添加物効果の実験および理論的研究」
各協力企業・団体賞(東京エレクトロン賞)	
工学部地球総合工学科4年生 駒井 尚子	●「大規模地震による宅地造成斜面の崩壊範囲の評価—がけ条例による建築禁止距離の新提案に向けて—」

「福島を感じて考えるスタディーツアー」 スタ☆ふく

『スタ☆ふく』は、『スタディーツアー福島』の略で、メディアを通じてではなく、参加者自身の目で福島の“今”を感じてもらうことを狙って2012年4月からスタート。

地元の旅行会社などの協力を得て参加者を募り、1回のツアーで20~35名が参加する。構成は大学生から50代の社会人まで幅広く、その7割が県外からという。これまでにツアーを6回開催。会津地方の観光地として有名な喜多市は、年間7000人訪れていた観光客が震災後は0人にまで落ち込んだ。ツアー参加者は実際に観光しながら風評被害に立ち向かうNPOの方々に密着し、福島の観光地の“いま”を感じた。また、農業で有名な二本松市では、ツアー参加者が農業体験を通じて「福島の野菜は大丈夫なの?」という漠然とした疑問に農家と直接向き合った。



2014年4月発行
阪大NOW140号 掲載

スタ☆ふくプロジェクトの福島大3年遠藤はるひさん(写真右、左は平野俊夫総長)は「東京、大阪、四国等から何度も来てくださる方も居て、ツアー後に福島の“今”を語る情報発信の起点になってくれているのが嬉しいですね」と、充実の表情を見せてくれた。

イベント運営サポートの様子



「つながる力」はスゴイ! ツナボラ

ツナボラは「つながるボランティア」の略。代表の阪大博士前期課程1年の大門大朗さんは、頑張る学生をサポートしたい、とボランティアセンターの役割を担う組織としてツナボラをスタート。

震災シンポジウム 学生協賛企画 学生ボランティアたちの 福島への想い

2014年3月8日(土)、大阪大学中之島センターで福島大学主催、大阪大学が共催となつて震災シンポジウム「福島の『今』、そして『未来へつなぐ』——東北への思いを関西への想いへ」を開催しました。その日、中之島センター階ロビーでは、震災以降ボランティアなどの活動を続けている福島大、阪大の4つの学生団体がポスター発表を行いました。大阪に福島の『今』を届けてくれた学生たちの活動の一端をご紹介します。

大学、そして福島県を元気にしたい 福島大学災害ボランティアセンター(学生団体)

2011年3月、30人ほどの福島大生から始まった災害ボランティアセンター。現在は330人まで増え、仮設住宅での傾聴活動、被災者向け10円バザーの開催、子どもを県内で遊ばせたくないという親御さんの声を受けて、子ども達を速く離れた海まで連れて行き遊ばせるなど、多様な活動を行っている。

福島大2年の三浦恒彦さんは北海道出身。ピアノを学ぶため大に行くつもりだったが、震災を経験したことで、県外にいる自分と被災者との間に温度差を感じ、音楽を使って何かしたいと福島大へ。当初、ピアノの特技を生かして仮設住宅でコンサートを開くなどしたが、一方的な押し付けにしかならないと感じ、まずは聴くところから始めようと傾聴活動に力を注いだ。

被災者の本音を書いてもらうための「つぶやきカード」には、『孫が残っているので心配だ』、『帰りたいけど帰れない』、『もう帰れなくてもいい』など普段からは見えづらい被災者の苦悩が綴られていた。



現在、三浦さんはこうした色々な想いを抱えて生活していることを県外の人たちや、時間を越えて後世にも伝えるべく曲を作成中だ。タイトルは「想い」。実際の声を曲として残せるのは自分にはできないと、真っ直ぐに語ってくれた。

大阪に居ながらできる支援を 3.11関西学生ネット阪大

2011年震災後早くから阪大の学部を越えた有志のメンバーでスタート。

現在行っている活動は大きく2種類。福島原発問題について、原発作業員や現地に住まわれている方に話を聞くなどのフィールドワークを行うチームと、大槌町の人たちと交流するプロジェクトを進めるチームがある。

阪大4年の遊佐教継さんらが行う「希望のひとはり」プロジェクトは、「大槌町のお母さんたち」と名産の手芸品をつくる。デザインは学生が行い、お母さんたちが縫いあげる。出来上がったものは、いちよう祭やまちかね祭、阪大近隣の市のフリーマーケットなどのイベントで販売し、利益はお母さんたちに返す。震災後バラバラになっていた町の女性たちが集まり、取り組むことで、やりがいを感じてもらったり、コミュニティの再生へつなげることが狙いだ。

震災当初多かった瓦礫を撤去するなどのボランティアは、街づく



大槌町のお母さんたち

りとともに徐々に必要性が薄まり、ニーズが変わってきた。大槌町の方々と話をしたのがきっかけだった。遊佐さんは「まずは、現地の皆さんが何を求めているかニーズを受け止めることから始めることにしました。大阪に居ながらできる支援を模索していきたいですね」と優しく遅く語ってくれた。

II グローバル化が進む教育

II グローバル化が進む教育

RESPECT

Revitalizing and Enriching Society through Pluralism, Equity, and Cultural Transformation

2014年3月発行
大阪大学ニュースレター63号 掲載

学生が岩手県・野田村サテライトで自主活動
博士課程教育リーディングプログラム
「RESPECT」にも取り組む

大震災から 「共生社会」を学ぶ



野田村サテライトで被災した子どもたちと「方言カルタ大会」

大阪大学の大学院教育プログラムのひとつ、未来戦略機構第5部門の「未来共生イノベーター博士課程プログラム『RESPECT』」は、2013年から東日本大震災で被災した岩手県野田村にサテライトを開設している。2014年2月11日には、学生の自主活動として、現地の子どもたちを招いて催しを行った。石塚裕子(工学)、モーチ・ゲルゲイ(文化人類学)、神田麻衣子(言語文化学)各特任助教たちの指導で、学生たちがイベント実施の具体化を進め、行事内容だけでなく関係機関との連携や安全管理など細部を詰めて取り組んだ。

プログラムの課題は多文化共生社会の実現で、「多文化コンピテンシー」を身につけたグローバルリーダーを育成するとともに、将来的には「未来共生学」の創生をめざしている。未来共生を担う資質「多文化コンピテンシー」は、コミュニケーションリテラシーやフィールドリテラシーなど6つの能力要素、リテラシーから構成される。このため、学術・調査研究のみならず、プラクティカル(実践)ワークをカリキュラムの骨格に据え、学外の様々なフィールド・実践の

現場における体験的学習を組織・展開する。この核として、野田村やインドネシアにサテライトがある。野田村は、NHKドラマ「あまちゃん」の舞台となった久慈市の南に位置し、東日本大震災で津波による甚大な被害を受けた。ボランティア集団力学を研究する渥美公秀人間科学研究科教授は、救援のためいち早く現地入りし、継続的支援を行っている。「RESPECTのめざす未来共生の萌芽がここにある」という認



神田麻衣子 特任助教
モーチ・ゲルゲイ 特任助教
石塚裕子 特任助教

識から、13年に野田村サテライトをオープン。自ら行動し地域の人々と協働するなかで、創造的共生と社会的包摂の実現について、ここから学ぶというものだ。

サテライトでは、2013年3月から現地でセミナーを毎月開講。村の人々と遠隔中継で吹田キャンパスを結び、災害復興などについて共に学ぶ。現地では、フィールドワークとして地域

の定例講座の子どもコースとして2014年度にも数回の開催が予定されている。現在の履修生である1期生たちは、未来共生を学び実践する機会として、意欲的に取り組んできた。RESPECT履修生は各自の専攻での研究に加え、このプログラムを並行して学ぶ。そのなかでさらに自主活動にも取り組むのには、格別の思いがあるという。

筒伶さんは介護の現場での経験から、福祉・共生をとらえ直そうと大学院に。地域コミュニティ放送「のだむラジオ」の企画、運営に力を入れる。「『アナウンサー体験』を通じて、子どもたちを将来の担い手としていざなう」ことが狙いだ。坂口恵莉さんは指導教員から勧められ、社会調査・フィールド実践の機会としてRESPECTを選んだ。「かわいい村の子ども達



(左から)井筒さん、長澤さん、坂口さん

の人々との対話・ヒアリングを行い、復興・活性化の道を探る。こうしたコミュニティー・ラーニングを通し、学生たちに自主的活動の機運が高まり、「地域の子どもたちと交流しながら学ぼう」と、今回の催しを企画した。

学生の自主活動ではあるが、同サテライトで

長澤理加さんは企業で働くなかで、日本とほかのアジアの国々の結びつきを意識するようになり、より深く学びたいと大学院に進んだ。「企画の『方言カルタ大会』は、岩手県の方言や大阪弁を織り交ぜて作成。互いの文化を知るきっかけとすることが目的だ」という。井

と「たこ焼き屋台体験」で交流できた。将来は研究というよりは、社会活動に取り組みたい」と言う。学生たちは、これからも現地の人たちのきずなを育みながら、自身の学びにつながる実践をすすめていく。



学生企画イベント実施へ向けてミーティングを行う「RESPECT」履修生と指導教員

■RESPECT
未来共生イノベーター博士課程プログラム (Revitalizing and Enriching Society through Pluralism, Equity and Cultural Transformation) の通称。文部科学省による博士人材育成のための事業「博士課程教育リーディングプログラム」でH24年度に採択。大阪大学では、他に4つのプログラムが採択され、それぞれ総長直轄の未来戦略機構に位置付け、大学をあげて取り組みを進めている。
詳細は、未来戦略機構HPをご覧ください。

大阪大学 未来戦略機構



福島大と阪大が「未来へつなぐ」 震災シンポジウムを開催

厳しい復興のなか、 被災者に寄り添い

福島大学が大阪大学との共催で、防災・減災について考えるシンポジウム「福島の『今』、そして『未来』へつなぐ—東北への思いを関西への想いへ」を3月8日(土)開催し、約200人が参加。東日本大震災から3

年を迎え、関西はどのように寄り添っていきべきかなどを議論した。入戸野修・福島大学長と平野俊夫総長のあいさつ後、第1部で鷲田清一・せんだいメディアテーク館長が「未来の世代のために復興支援



鷲田清一
せんだいメディアテーク館長

と大学の責任」と題して基調講演。最近のマスコミ報道が「記憶の風化を憂う」ことに対し、「震災は新たな形で今も続いている」と指摘した。また、ある秩序の上にはか成り立たない偏差値偏重等の教育が如何に不安定で虚しいものかを震災は露呈させ、「何でも食べられる』『どこでも眠れる』『誰でも仲良くなれる』という生きる力を育むことが、教育の大事な使命だ」とも語った。

続いて第2部で、FURE※1が「震災後における福島大学の活動」「土壌から作物への放射性セシウムの

移行」「地域コミュニティの再生に向けて」を報告。これに関連し、OECD東北スクール※2の釣巻洋子さん=同志社国際高校2年=も活動を報告した。福島県いわき市で被災した釣巻さんは「つらい経験をした仲間100人と一緒に頑張っている。8月にパリで東北復活祭を計画していて、自然災害の怖さ▽支援への感謝▽東北の魅力を伝えたい」とふるさとへの思いを話した。

第3部のパネルディスカッションは「地域で共に生きる力を育む〜福島島の経験を次に生かす〜」をテーマ

に展開。復興の厳しさ、子どもたちのメンタルケア、ボランティアの活躍など多角的に意見を出し合った。



※1 福島大学つくしまふくしま未来支援センターの略称
※2 経済協力開発機構(OECD)、文部科学省、福島大学が協力し、復興サポートの人材育成を目指して、復興教育プロジェクト(文部科学省復興教育支援委託事業)として2011年から活動。詳細はhttp://oecdtohokuschool.sub.jp/index.html